

嬉しいノーベル賞受賞

社会の劣化を暗示させる報道ばかりの日本。IT関連株価の高騰だけが徒花のように咲く。

その中で久々の明るいニュースが破合憲三名誉教授のノーベル化学賞受賞だ。ここから祝福申し上げたいのは、日本人が国際的な賞をもらったからというだけではない。同氏が自然界の「謎」に魅せられ、研究に没頭し、壁が立ちはだかつて「暗いところを頭にライトをつけてたどっているような気分」で研究を続けられたという点だ。好きだから、そして周りがそれを支援したからできた。

そこで眼に留まったのが、10月9日の本紙1面「産経抄」にあったスラインベックの言葉だ。「天才とは、蝶を追っていつの間にか山頂に登っている少年である」

日本がいまだに短期成果主義や数値主義を信奉し、それがZ世代の「生きづらさ」の一因であることは令和6年8月28日付の本欄で書いた。流れは止まらない。今年はじめに政府が国立博物館・美術館に対し、入館者数や自己収入比

子供はスマホを捨て蝶を追おう

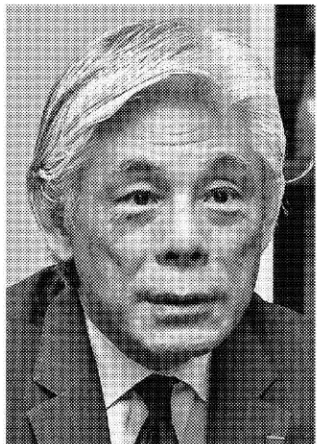
率の向上について厳しい目標を課した。日本が多く潜在力を残している文化・思想まで市場価値で評価して、その真の価値を見殺しにするに等しい措置である。

いつまで続く短期成果主義？

如何なる組織も収益を挙げることは重要だ。ただそれが最終目的であってはならない。社会貢献のための手段ははずだ。まして学問の研究や文化活動はそれ自体の崇高な目的があり、「いくら稼げるか」は評価の基準にならない。「研究や文化が衰えれば社会は何を失つか」を考えた政策を取らねばならない。

学問であれ文化であれ、真・善・美を求め、ひたすら努力・研鑽を積むことで初めて成果を挙げることができる。省力化、AIによる近道はない。かつどのような成果を達成できるかはやってみないと分からない。好きなことに没頭

正論



元文化庁長官
近藤 誠一

しているうちに、突然ある高みに達していることに気づくのだ。

評論家の小林秀雄も評論では目的地は設定しない。重要なのは「歩き方」であり、着いたところが目的地なのだと言っている（『モオツアルト』）。

好きなことに没頭することこそが生きている証しであり、その結果が社会に貢献し、国力となるのだ。初めから成果を求めると、どうやって最短の時間で（タイパ）、最低のコストで（コスパ）そこに到達するかばかり考えてし

まう。そしてそれができそうな目標を選ぶ。それは蝶が導いてくれるであろう本当の山頂ではない。

否、それすらも最終の目的地ではない。歌舞伎俳優の坂東玉三郎さんは、達成すべき山頂を目指して技を磨くが、そこに近づくと次の山頂が見えてくると言われた。蝶は、常に次の頂へと飛んでいくのだ。

常時接続が奪つ熟慮のとき

先日、京都のシンポジウムでいくつか重要な研究を知った。

ひとつは子供は1日2時間以上スマホを使うと、それに比例して成績が落ちるという米国のデータだ。もうひとつの実験結果は、スマホを見ているときは、友人と楽しく過ごしているときと同じように、短く感じる。しかし楽しかった友との会話の記憶が長く残るのに対し、スマホに費やした時間のことは残らないというドイツのデータだ。

さらに有名な進化人類学者ダニエル・デネットが提唱する、ひとは他人（動物やモノも含む）の行動を理解して予測するための「世界認識モード」として物理、設計、意図の3つのスタンスを持っているという説が紹介された。物理スタンスとは単なる物質としての動き（引力によって下に落ちるなど）の予測、設計スタンスはモノの機能（画面をスワイプすれば別の画像が現れるなど）の予測、最後の意図スタンスとは相手が何をしようとしているかその意図を予測するものだそうだ。

そしてスマホという「常時接続」世界では操作をしているだけで（設計スタンスの段階で）他と

つながっていると勘違いしてしまうこと、悩みや寂しさを感じるとすぐ気軽にAIに相談してしまい、自分で熟慮する時間がなくなってしまうことも指摘された。

それでも、何処にいても誰とでも常時つながっているスマホを自分から手放すことは意外に難しい。毎日フェイスブック（FB）を使う約3千人を対象とした米国の調査によれば、1カ月使用を遮断すると確実に幸福度が上がった。しかしその95%が100日以内にFBに復帰したという。

スマホから自由になるには、それを超える魅力を持つ何かを見つけないといけない。しかし、今の社会に、蝶ばかり追っている若者を支えるガッツがあるのか。企業はこうした人材に「場」を与える懐の深さはあるのか。政府は文化や研究機関にそうした環境を与える「国家百年の計」はあるのか。

子供たち、スマホを捨てて、好きな蝶を見つけて追いかけよう。大人たちはそれを応援しよう。それができる社会だけが「強く豊かな国」の基礎を造るのだから。

（こんどう せいいち）